

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 17
2021.11

図書館のすすめ

21世紀以降、インターネットの急速な普及とその活用の進展に伴って、大分、便利な世の中となった。また、それと共に、活字離れも進んだ。新聞各社の発行部数は年々、減少している。また、読書をする若者は昔に比べるとその割合は低くなってきている。私が教員として着任した2008年当時、国際関係学部の授業の一環で新聞のコラム欄をノートに写して書き、課題として提出をするように学生に指導したのを、今でも鮮明に覚えている。そうした活字離れを少しでも抑止したい当時の教育上の風潮であったのかもしれない。しかしインターネットの普及による影響だけかという決してそうではなさそうだ。それまでもテレビや音楽などといった活字ではなく主に視聴覚に訴えかけるマスメディアが台頭し、その頃から活字離れの動きが実は始まっている。

そして現在、デジタル時代であって、スマートフォンやタブレットなどを使った気軽な感覚での情報のやりとりが一般化し、しかもそれぞれの嗜好に合わせた情報を享受することができるようになった。利便性の向上と共に、人々の情報検索や情報入手の場はそうしたメディア媒体に移行しつつある。

こうした活字離れは、当然、図書館の利用を減少させる一因となる。図書館は、言わずと知れた「活字の宝庫」であるからである。活字にされたもの（和・洋の図書、雑誌、新聞、各種資料）が軒並みところ狭しといわんばかりに、図書館には多く並べられている。図書館を利用する人の多くは、これらの蔵書が目当てとなる訳であるが、必ずしも図書館の利用価値はそれに留まらない。図書館には、様々な顔がある。本を読みに来る人、資料を探しに来る人、DVDやCDを視聴しに来る人、勉強しに来る人、そして休憩をしに来る人など、目的は様々である。そうしたなかで、私が図書館を初めて利用したのは、小学生の頃であったと記憶している。読書感想文を書くためだった。本を読みあさり、まとめる作業をするには幼かった私にとって、図書館は最も適した場所であった。以来、図書館は自宅では得られない集中できる場所というイメージがついた。図書館では、勉強する中・高校生も当時、沢山いた。お互いに刺激し合い、同時に、友達と交流できる場所

国際総合政策学科

教授 蓼沼 智行



でもあった。

次に私と図書館の関係について少し考えてみたい。

大学や大学院時代には、論文作成によく図書館を活用した。本学商学部の図書館には会計学の古書がケースに入られて飾ってあり、その古書は今ではほとんどみることができない貴重なものとなっている。私は商学部の図書館や大手広告代理店の電通が当時管理していた吉田秀雄記念図書館によく足を運び、マーケティング論や経営学の図書や雑誌を探しては読んでいた。私の専攻する学問領域は、実学であり、その研究手法は、主にアンケート調査やフィールドワークなどから分析や検証することが多く、それ故に、図書館を利用する際は、入手したデータや資料をまとめることを目的としていた。文献研究をする際に、図書館の存在は、非常に大きかった。DVD化されたデータベースを用いることで、比較的簡単に専門分野の研究論文や雑誌検索ができたからである。当時、図書館のデータベースは研究をする上で貴重なツールであった。また研究室をもつことがない学生にとって図書館は、冷暖房も完備されていて、必要に応じて資料を得ることができ、且つ集中して研究をするのには最適な空間であった。



▲『スムマー 算術・幾何・比及び比例全書』（1494）
世界最古の複式簿記の文献 日本大学商学部所蔵

大学院修士課程を終えてから、アメリカペンシルバニア州立大学に留学する機会があった。その時もよく図書館を利用して過ごした。アメリカの大学の図書館は、非常にスケールが大きく、日本の図書館と比較して解放感のある空間が広がっていた。加えて、24時間開放されていて、いつでも利用できるのが便利であった。また当時、図書館でアメリカの学生の勉学に対する情熱をまじまじと

感じ、よい刺激を受けた。特に、テストやレポート課題提出が近づく時期になると、図書館の自習室は連日、学生でごった返していた。日本の大学と比較して卒業をするのが難しいとされるアメリカでは、学生は、この時期になると、それまで以上に真剣な眼差しで、自習室に閉じこもっていた。



▲ ペンシルバニア州立大学図書館
Penn State University HPより

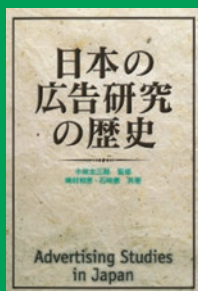
大学院博士課程に入ると、マーケティング論や経営学に加え経済学や国際経済学といった学問分野にも視野を広げて研究するようになった。国際関係学部の図書館2階にある国際機関資料室は、1979年に国連より国連寄託図書館として指定され、1985年には、欧州委員会からEC資料センター（現：EU情報センター）として指定を受けている。他の図書館では入手することのできない文書や刊行物などをはじめ、EUの経済や政治の仕組みを理解するための資料や情報がそこでは得られることから、レポートを書くためによく利用したものであった。この時、マーケティング論と経済学の融合分野であるマーケティングエコノミクスといった学問領域に興味を持ち、現在の研究の対象の1つとなっている。そうした意味では、国際機関資料室での利用経験が、これらの研究分野へのきっかけとなっている。

その後、大学の教員になり、やがて長期派遣留学の機会を得た。研究対象国として真っ先に選んだのがアメリカ合衆国であった。マーケティングや流通の先進国



▲ EU情報センター

であったためだ。幸運なことに、ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校（以下、ストーニーブルック大学）に留学することが許可された。ストーニーブルック大学では、研究室を与えて頂いたこともあり、図書館を利用するというよりは、図書館で図書を借りることの方が多かった。当然であるが、日本の



▲『日本の広告研究の歴史』（電通1997）吉田秀雄
記念財団HPより

図書館では、洋書に触れる機会が少なく、洋書のジャンルや範囲も限られてくる。ましてや、研究者の場合、その専門性が強く全ての研究に対応できる程のバラエティに富んだ図書館というものは、皆無に近い。それも和書が中心となれば、自ずとその傾向は一層強まる。それ故に、現地アメリカの図書館の本は貴重であり、日本の図書館よりもはるかに豊富であった。また、図書館自体の規模も大きいためスペースに余裕すら感じられた。アメリカの経済、特に地域経済について当時、フィールドワークをしていたことから、地域経済に関する図書や資料をとにかく沢山、頭に知識を叩き込んでいった。正確に理解するよりも知識量の増大を図り、その特徴を把握し、そこから仮説を立てるためだ。ストーニーブルック大学に来てから、だいぶ経った頃であろうか。図書館のコピー機に便利な機能があることを発見した。見た目は普通のコピー機であったが、図書を読み取ってPDF作成し、それをメールで送るというものであった。この機能を知った時には、驚きを隠せなかった反面、もう少し、早くにこの機能を知っていれば・・・とも思ったが、結局のところ、データを保存するのではなく、その場で集中して頭に叩き込んだ。時間もなく、その方が効果的であったためだ。

なお現在は、日本の図書館でもコピー機には同様の機能がついているようだ。ただし、著作権法第23条の「公衆送信権」により、制限されている。しかし改正著作権法が2021年5月26日に参議院本会議で可決、成立しており、その実用が現実的なものとなってきている。新型コロナウイルス感染拡大で図書館利用が制限され、特に研究者からの要望が大きく、国立国会図書館等では調整を図っているといわれている。今後、2年以内に施行されるとのことだ。

図書館は、本を読む場所であることはいくまでもない。人によって、利用価値は様々である。試験や資格試験、SPIや公務員試験の勉強を



▲ ストーニーブルック大学図書館

したり、レポートや卒論などを書いたり、ゼミナールの発表の準備をしたりと、学生の皆さんにとっては、それぞれの利用の仕方があるかと思う。図書館も年々、進化しており、検索機能も充実し便利になってきている。図書館にいかなくてもインターネットを介して検索することもできる時代である。それでも、図書館を訪問することには多くの利点がある。沢山ある図書の中での一冊の本との出会いが、その人の人生に大きな影響を与えることもある。本を読むことで、それまでとは違った視点で物事を捉えたり考えたりもできるようになる。大学で学ぶ者として、是非とも、学生の皆さんには、様々な形で図書館を利用して頂きたいと思う。

● ESSAY

大学図書館は、私の留学時代の楽園だった！

国際総合政策学科 教授 陳 文学

1990年代初め、私は中国から日本へ留学してきた。東京都立大学大学院に入学することができたが、私費留学の私には、学費や生活費を賄うことだけで精一杯で、教科書や参考書を買う余裕がなかった。幸運なことに、当時、東京都八王子市南大沢に移転した都立大学の新しいキャンパスには立派な図書館が建てられており、館内の蔵書数だけでなく学習環境も素晴らしかった。その後、都立大学で9年間に渡って研究生生活を過ごし、大学図書館は私にとって無くてはならない存在であり、まさに楽園であった。

周知のように、中国は1970年代末にそれまで実施していた社会主義計画経済を取りやめ、資本主義市場経済への模索を始めていた。改革開放政策により、1980年代には中国経済が一定の発展を遂げたものの、大きな社会的混乱も経験した。私は、近代の経済思想や日本の経済発展の経験を学びたいという強い思いで日本へ留学し、マクロ経済学を専門とする鵜田忠彦先生のゼミの門を叩いた。

ところが、ゼミではいきなり難解な英語で書かれた *Lectures on Public Economics* (Anthony Atkinson, Joseph Stiglitz 著) という公共経済学の教科書が出され、近代経済学理論の基礎知識がほとんどなく、日本語も英語も外国語の私にとって、それを読み解くのは大変辛かった。さらに、今から30年前はインターネットも電子辞書もなく、日中英3ヶ国語で単語と専門用語を調べるには大学の図書館へ行くしかなかった。大学の図書館には、外国語辞書や大辞典、そして経済学の専門辞書

などがあり、大変助かった。専門知識も語学も不十分で、授業やゼミの議論になかなか付いていくことができなかった私は、自由時間のほとんどを大学の図書館で過ごした。時間さえ忘れるほど没頭し、閉館の鐘の音とともに本を片付けていたことを今も覚えている。

都立大学の図書館の開館時間は9:00から22:00と比較的長く、また、図書資料以外にもキャレルと呼ばれる自習スペースが多く設置され、学習や資料調査には大変適した環境である。毎朝、入館を待つ学生の列もあれば、閉館ギリギリまで滞在する学生も大勢いた。図書館から大学最寄りの南大沢駅までの道のりは細く、歩くには少し時間がかかるが、京王電鉄もそれなりに遅くまで運行していたので、余裕を持って電車に乗ることができたことは、今振り返れば有難いことだった。

近年、「サブスクリプション」というサービスが流行っており、会員登録すれば商品やコンテンツをいつでも繰り返し何度でも利用することができるようになっている。大学の図書館も、ある意味では学生のみなさんにとって「サブスク」のようなサービスかもしれない。学生である間は、図書館の蔵書や資料をほぼ制限なく自由に利用できるからだ。「サブスク」のメリットは、利用すればするほど「得」をする。貧乏学生だった頃の私にとって、大学の図書館は楽園だっただけでなく、「サブスク」のようなメリットも提供してくれていた。学生のみなさんにはぜひ大学の図書館を存分に利用することを勧めたい。

● ESSAY

図書館の楽しさ

ビジネス教養学科 教授 永田 美江子

自称“活字好き”の私は子どもの頃に読むものがないときは、頭痛薬の効能書きを読むという奇妙なことをやっていました。中学生では家の本棚にあった歴史ミステリーを読んで、世界七不思議やフリーメイソンの話に妄想を広げ。高校生になってからは、静かな図書室の一角で夏休みの課題をやったり、本を読んだりして過ごすひとりの時間がこの上なく好きになりました。そういえば夏目漱石の「こころ」を夏休みの課題図書で読んだ時には、主人公の先生の気持ちが読み取れずに残念な思いをしたこともあります。大学に入学してからは図書館の書庫であまり人目に触れられていない専門書を手にして、「私って知的になったかも」とうぬぼれてみたり、仲良しの友人と図書館前で待ち合わせをして、中には入らずに一目散に食堂へいった思い出など。本や図書館は私の人生のいろいろな場面に登場してきました。本無くして今の自分は語れないと思います。

では、どんな本がお気に入りかという私自身の読書傾向はばらばらで、研究に必要な専門書から高校生が読むようなライトノベルまで読みます。読書は、活字を通して違う世界に入ったり、先人の考えを知ったり、違う自分になれることが醍醐味だと考えます。一方で、書棚の前でいろんなタイトルを読み、作者の名前を見て、この作品はどんな内容なのかなと妄想するのも楽しい時間です。そして、面白そうなタイトルだと思って借りた本が読み始めてみると、自分が考えていた内容と違っているときのなんともいえないやさしさ。また、ただ単純に図書館の中でインクのにおいを嗅ぐことも図書館の楽しさと言えなくもないと思います。活字離れが問題となっている昨今、本を読み内容を理解することももちろん大事ですが、気負わずに本や図書館に触れてみることから始めるのも悪くはないと思うのですが、皆さんはいかがでしょう？

● FACULTY PUBLICATIONS

本学部教員の刊行物紹介



国際協力の扉

富岡 丈朗 著

[大空社出版]

本書は、「国際協力」分野を専門領域とする著者が、これまでの35年間で経験してきた、政府ボランティア、国際協力機構技術協力専門家、政府開発援助コンサルタント、NGOの管理運営者など様々な立場での国際協力実施者としての経験内容と、現在大学で講義している「国際技術協力論」、「NGO/NPO論」、「ボランティア援助技術」、「地域開発論」の4教科のテキストを合冊したものである。

前半のⅠ.国際協力ダイアリーでは、25歳から現在(60歳)までの国際協力分野での様々な実践者(プレーヤー)としての経験を紹介している。ここでは、青年期からの海外への志向の原点や技術協力の経験やそのキャリアの形成の経緯をまとめた。

後半のⅡ.国際協力テキストは、現在講義中の4教科の要約版教科書と巻末の用語集で構成されている。「開発協力ノート：国際技術協力サブノート」、「NGO/NPOサブノート」、「ボランティア援助技術サブノート」、「地域開発サブノート」という名称で講義ごとに分けられ、実際の授業ではA4版のカラー印刷に授業での気付きを書き込んだり、追加情報のプリントを完成させてノートに折り込んだりしながら授業ノートと資料集を同時に完成させていくサブノート形式となっている。また、各単元に演習事例やグループワークの結果をまとめるワークシートを用意し、演習形式の授業では演習結果を整理し、プレゼンテーション内容を説明できるようにしている。

本書を読んで、様々な機会を見つけ、国際協力に気軽に参加してもらえば幸いである。



アメリカを動かす宗教ナショナリズム

松本 佐保 著

[筑摩書房 ちくま新書]

本書は4年間のトランプ政権を支えたキリスト教福音派について、また2020年大統領選挙を宗教票という観点から分析、カトリックのバイデン大統領誕生にも言及。福音派が支持したトランプの政策を具体的に検証、バイブル・ベルトとされる南部の州での中絶の極端な制限、3人の保守系の最高裁判事の任命、「国際的宗教の自由」法案の導入などである。米国の主要都市郊外には、メガチャーチと呼ばれる2,000人以上を収容出来る巨大な教会が全米で5,000近くあり、礼拝だけでなく、福祉やエンターテインメントを担う。

また米国の対中国強硬外交は、香港の民主化運動に関与するキリスト教徒や、新疆ウイグル地区でのイスラム教徒への共産党政権による弾圧への対抗措置である。それは米国の「国際的宗教の自由」理念によるもので、宗教ナショナリズムが背景にある。著者は2019年7月米国務省主催の「国際的宗教の自由」大会に参加する機会を得、米国在住ウイグル人権団体代表や、香港出身のプロテスタント牧師、またキリスト教保守系のロビー団体等にインタビューした。米国の宗教に対するこうした強い思いが、その政治や外交を動かしている。

バイデン政権でも人権外交とし、宗教の自由を弾圧する中国への厳しい外交は継続、中国依存の日本企業にも制裁が科せられる事態が起きている。トップポイントという1万人のビジネスリーダーが選ぶ今年上半年のベスト10に、本書が6位となった。アメリカとのビジネスにもその宗教的な背景の理解が不可欠というメッセージなのであろう。



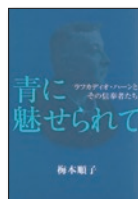
ヨーロッパ各地で大当たり 剣劇王 筒井徳二郎

田中 徳一 著

[勉誠出版]

学位論文をもとに刊行した8年前の著書で、この度一般書として書き改めた。本書は、今日忘れられているが、昭和初期、欧米22ヵ国で反響を呼んだ大阪の新派・剣劇役者、筒井徳二郎の足跡を追う。筒井は世界恐慌下の1930年から翌年にかけて1年3ヵ月、特別にアレンジした歌舞伎と剣劇で欧米70ヵ所を巡業、何十万もの人々に感銘を与え、国際親善に貢献していた。そのみか西洋の著名な演劇人たちに刺激を与え、西洋演劇のパラダイム転換を促す一因となった。このように功績がありながら、忘却された日本人役者の海外巡業と異文化接触の軌跡を、20年の歳月をかけて明らかにすることができた。

しかしそれが実現できたのは、無数の思いがけない人や資料との出会いがあったからだ。一例を挙げれば、調査を始めた当時、幸いにも筒井一座の海外巡業に同行した元座員の女性が存命されていて、海外より持ち帰った貴重な資料の数々をご提供いただいた。それらは、本人は気に留めていなかったようだが、母親が風呂敷に包んで物置の天井に吊るして大切に保管してくれて、そのまま何十年も眠っていたものだった。一言言及しないが、本書の骨組みはほとんど、そのような幸運な偶然によって見出された資料で成り立っているのも、是非一読願いたい。



青に魅せられて—ラファディオ・ハーンとその信奉者たち

梅本 順子 著

[静岡新聞社]

このタイトルをつけたのは、生涯を通してのハーンのこだわりが「海」にあったと考えられるからである。「青」は、ギリシア生まれのハーンにとっては陰の母を連想させる色でもあった。詳細な海の描写は、アメリカ時代の小説『チタ』と、日本で執筆した「生き神」に見られる。いずれの作品も、執筆時より三、四十年前におきた実際の災害(それぞれハリケーンと津波)をもとにしており、後者の「生き神」は、期せずして後世の津波防災に貢献することになった。晩年、海にこがれたハーンがたどり着いた日本の原風景は、六回の夏を過ごした焼津に求められるだろう。具体的には、次の視点からハーンを論じた。

ハーン作品の流布には、教え子の存在が不可欠であった。英語で発表された作品があたかも日本語作品であるかのように身近なものになったのは、教え子らにより、いち早く訳されたことが大きい。

また、日本での語り直しが成功した背景には、アメリカ時代の記者としての修行があった。シンシナティからニューオーリンズへの移動で、社会派の突撃リポーターから、文芸欄の記者となり、さらに仏文学作品の英訳を通して、作風を学んだことが役立ったのである。

さらに、移動ごとに文通を絶ったとして非難されるハーンだが、ハーンの死後、ハーンを批判しながらも書簡集や伝記出版を試みるものが後を絶たなかったことも、ハーンの知名度を上げることにつながったといえるだろう。

● 本学部教員の共著等紹介

書名(出版年月)	著者名等	出版社
シリア・レバノン・イラク・イラン (2021年2月)	中村 覚(監修) 小副川 琢(共著)	ミネルヴァ書房
よくわかるEU政治(2020年4月)	坂井 一成・八十田 博人 (編著) 鄭 勛燮(分担執筆)	ミネルヴァ書房
第三の核時代 —破滅リスクからの脱却(2021年3月)	永井 雄一郎(分担執筆)	長崎大学核兵器廃絶 研究センター(RECNA)
レポート・論文をさらによくする 「引用」ガイド(2020年6月)	オリベイラ ディエゴ(共著)	大修館書店

所蔵資料紹介

ハーン・コレクションについて

特任教授 梅本 順子

国際関係学部にあるハーン・コレクションの由来、並びにその特徴については、以前コレクションについて書く機会を頂いた折に触れたので、その時に取り扱わなかった書籍を中心に紹介したいと思う。ハーンは、日本国内では人気があることから、ハーン関わった地域や教壇に立った教育施設以外にも、ハーンのコレクションを持つ施設は少なくない。当国際関係学部もハーンとは直接関係がないものの、ハーン関係の貴重書を含むコレクションを持つ施設の一つとなっている。

当学部のコレクションにある書籍の大半は英文の書籍である。大別すると、①ハーンが存命中に出版した日本関係の書籍 ②死後、ハーンの遺稿やアメリカで記者時代に書いた記事を中心に編集、出版されたもの ③ハーン書簡や伝記をはじめ、ハーンについての研究書籍 ④三つのカテゴリーに含まれないその他のものの4種類となる。

今回、④のその他の中から、ハーンが東京帝大で行った授業に出席していた学生のノートをもとに、編集、出版されたハーンの講義録を紹介したい。これらは1915年から20年代にかけて出版されたものが多く、コロンビア大学の英文学の教授であったジョン・アースキンの編集により、まず数冊が続けて出版された。その後、日本人（かつてのハーンの学生ら）の手により出版されたものが続いた。以下、順を追って見てゆきたい。

最初は1915年に Dodd & Mead 社より出版された第1集で、*Interpretations of Literature I&II*。第1巻はほとんどが英文学で、第2巻は仏文学やアメリカ文学も混じっている。大谷正信、内ヶ崎作三郎、落合貞三郎など数名の学生がハーンの英文学の授業（1896-1902）で筆記したノートをアースキンが編集したものである。ハーンはノートがとれるようにと一語一語ゆっくり語ったといわれているが、ハーンの熱意のみならず、受ける側の学生の力量が感じられる。ちなみに大谷と落合は松江中学と東大の両方でハーンに学んだ。

第2集は1916年に同じくアースキンによって編集された *Appreciations of Poetry*。これも第1集同様、数名の学生による講義録だが、テニスンのみ不備だとアースキンが述べている。このテニスンについてはハーンの学生の一人であり、後に旧制四高教授となった岸重次（1903年東大卒、ただし1901から2年続けてハーンの授業を履修）によって、1941年に北星堂より *Lafcadio Hearn's Lectures on Tennyson* が出版されている。第3集は、1917年に出版された *Life and Literature* である。

これら以外にもアースキンによるものが数冊あるが、いずれも第1集から第3集のまとめなおし、あるいは再編集を施したもののなので省略する。ただ、1921年出版の *Books and Habits* は、すでに

出版したものを再編集したものであるにもかかわらず、ハーンの東洋人学生に西洋文明の特徴を教えたいという意図からなる項目が並ぶ。それが、「英詩の中の愛」「英詩の中の理想の女性」「英文学の中の聖書」などである。

次にハーンの学生自らが、編集した講義録をいくつか紹介したい。*Some Strange English Literary Figures of Eighteenth and Nineteenth Centuries* (1927) は田部隆次編集の東大の講義録で、一部アースキン編の再録もある。ただ、同じ講義は2度としなかったというハーンが例外的に複数回講義したのが William Blake であり、それがここには含まれている。

続けて *Lectures on Prosody* (1929) は、落合貞三郎注釈で、1901年に行われた詩の韻律に関する講義録、*Victorian Philosophy* (1930) は、田部による、1899年から1900年にかけての講義録で、ハーンが好きなスペンサーの進化論を文学に取り入れたことがわかる。*Lectures on Shakespeare* (1931) は、ハーンの次男稲垣巖の編集で、1899年のシェイクスピアに関する東大の講義録がもとになっている。ハーンの学生だった森清子爵のノートを編集したとのことである。

これらはほんの一部であり、1920年代から30年代にかけてハーンの子孫や講義録の一部が、さまざまな形で編集され、出版されるという状態が続いていたことがわかる。それらは、分厚いがっしりした革装からほんの数ページの冊子形式のものまでさまざまである。かつて、1924年に招聘されて東大の教壇に立ったエドモンド・ブランデンが、「ハーンと名がつけばメモ程度のものまで書簡集としてまとめられて出版される」といったが、ハーンの講義録も同様に、多くの教え子らによって出版されてきたのである。今回紹介したものは、ハーン自身の書いた日本関係の書籍やアメリカ時代の記事をまとめたものに比べれば、知名度は高くない。しかし、ハーンの教えを受け、その言葉に魅了された学生のノートをもとに、ハーンの講義の全貌がわかるような書籍の編集が幾度となく繰り返され、さまざまな形で出版されてきたことに、ハーンの学生に与えた影響の大きさを改めて考えさせられるのである。



▲本学部所蔵ハーンコレクションより

教員による推薦図書紹介

●RECOMMENDED BOOKS



イラスト&図解 知識ゼロでも楽しく読める 数学のしくみ

加藤 文元 監修 [西東社]

国際関係学部のような文系学部には、数学を苦手としている学生が少なくないようだ。そもそも、文系学部に進学を決めた理由のひとつが、数学が好きではないからだったのかもしれない。しかし今日では、民間企業に就職する際に多くの学生が受けるSPI試験や、教員・公務員志望の学生が受ける採用試験でも、数学は避けて通れない。「ビジネスマンのための数学的思考力」などといった書籍やレポートも巷にあふれるようになった。また、大学で社会科学系のテーマを専攻していても、日々の授業やゼミ活動、卒業論文の執筆は、数学から逃れられなくなっている。オリンピックの経済効果、緊急事態宣言が雇用に与える影響、自社製品の需要予測、政党支持率、有権者の投票行動、貿易の決定要因、国家間の紛争発生メカニズムなど、経済学・経営学のみならず、国際関係論や政治学の世界でも、今や数学は引っ張りだこだ。

題名や表紙のデザインから侮ることなかれ、本書は、オイラーの等式、リーマン予想、フェルマーの最終定理など数学の最

新トピックを網羅し、しかもそれを初学者にもわかりやすくカラフルなイラストや図表を多数用いて解説してくれている。さらには、私たちの身近な生活に関わる数学、例えば、長さの単位はどのように決まったのか、マンホールの蓋はなぜ四角形ではなく円なのか、素数なんて学んで何の役に立つのか、等々の疑問についても、シンプルな解答を提示してくれている（そのシンプルさ自体も数学らしさだ）。

98の数学にまつわるトピックが各2ページで解説されており、読者は関心のあるテーマから読み始めれば良いだろう。数学が苦手な読者も、必ず興味が持てるテーマが探せるはずである。数学はとっつきやすい学問であるということを教えてくれる本であるとともに、数学の心得がある読者にも、新たな関心をもたらしてくれるトピック満載である。文系で数学ができると、ちょっとカッコいい。

ほら、皆さんも読んでみたくなったでしょう。価格も新書並み。数学の辞書がわりに、手元に置いておきたい本である。

国際総合政策学科 准教授 小田 正規



ビューティビジネス 「美」のイメージが市場をつくる

ジェフリー・ジョーンズ 著/江夏 健一 他 監訳 [中央経済社]

「美（ビューティ）」に対する欲求は、文明の始まりとともに、すでに数千年前から存在していた。しかし、ビューティのスタンダードもそれをかなえる手段も、19世紀までその土地に根ざした、きわめてローカルなものだった。しかし、現在、ビューティは「国際的な広がり」をもつ、市場規模4,000億ドル（40兆円）を超えるビッグビジネスとなっている。

実用的とは言い難い、数時間で効果が切れる香水や一度塗れば見えなくなるフェイシャルクリームといった製品が、なぜいかにして国境を超えて私たちの生活に深く入り込んだのか。ビューティビジネスはいかにして国際的に成長を遂げたのか。本書はこの点を扱ったビューティ産業の国際経営史であり、時代の変化を捉えた起業家の役割、ビューティの理想像の形成とそれを「内包するブランド」が成長する過程、ビジネスの正当性という3つの視点から論じている。

19世紀以降、欧米諸国のビューティがスタンダードとなり、日本企業もその影響を強く受けてきた。過去において、日本

企業は欧米のトレンドを見ていればそれでよかった。しかし、21世紀に入り、グローバル化は新たな段階を迎え、ビューティの多元主義ともいえる時代になっている。欧米社会のビューティの理想像はいくつもある理想像のひとつとなり、欧米以外の様々な国の企業にチャンスが訪れようとしている。

日本企業はこうした時代の変化をどのように受け止めればよいか。環境の変化を読むことで新たなビジネスチャンスが生まれるとしたら、ビューティビジネスのグローバルな発展過程を歴史的に検証することで、「現在の新しさ」(E.H.カー)を理解し、進むべき新たな方向性が見えてくるだろう。

国際経営の観点からは、とくに第6章「野望はグローバル、市場はローカル」、第9章「グローバル化と、トライバリエーション」が参考になる。各企業の歴史については、『P&G ウェイ』（東洋経済新報社）、『多国籍企業の変革と伝統』（文眞堂）、『ロレアル「美」の戦略』（中央経済社）、『「美」のブランド物語』（碩学舎）も併せて参照されたい。

国際総合政策学科 准教授 金崎 賢希



なまえのないねこ

竹下 文子 著/町田 尚子 絵 [小峰書店]

いつも行く書店の絵本コーナーに、そっと積まれていた『なまえのないねこ』。澄んだ瞳でまっすぐこちらを見つめるねこに引き寄せられ、手にした絵本はなまえのないねこが自分のなまえを探しに出かける話でした。

「なかなか やまない あめ。あめ、あめ、あめ。こころのながか あめの おとで いっぱいになる。」
ねこのこころの中の雨はふりやまないのです。

私の専門は臨床心理学です。応用心理学の一つで人の支援を考える学問ですが、この学びの面白さを伝える時に絵本が活躍します。この絵本は、自分以外のねこや犬にはなまえがあるのに、自分にはなまえがないというねこのつぶやきから始まります。なぜねこは自分のなまえを探しに出かけたのでしょうか。どうしてなまえが必要だったのでしょうか。

Freud,Sが創始した精神分析では、なまえは親からの最初のギフトとされています。そのギフトがないことから「これまで誰とどんな人生（猫生？）を送ってきたのだろうか」とねこの生い立ちに思いが向けられます。ごはんはどうやって食べて

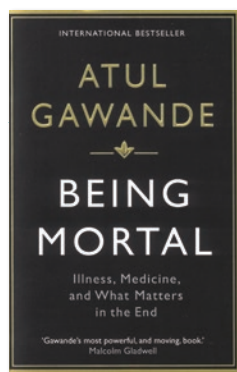
きたのか、安全な寝場所があったのか、誰かとの間で愛着（情緒的な絆）を形成できたのか、他者との関係性は築けたのか……と、まさに人の心の発達に欠かせないテーマが浮かび上がってきます。

でも、ねこは気づくのです。メロンと名付けてくれた人に出会って、「ほしかったのは、なまえじゃないんだ。なまえを よんでくれる ひとなんだ。」と。

ねこのこころの中の雨に、一緒に傘をさしてくれる人、濡れた毛を拭いてくれる人が現れたのです。ねこが探していたのは、名付けてくれた「人」との間で味わうやすらぎでした。生きる上で愛着がいかにほどに大切であり、必要であるかを考えさせられます。

このような絵本を通した学びは、人のこころの物語を理解する時に手がかりを与えてくれます。大人は長い自分の歴史があるだけに、絵本の深い語りかけによって、こころの物語を再構成するきっかけを得るかもしれません。ぜひ、学生さんにおススメしたい作品です。

国際教養学科 教授 有木 永子



Being mortal: Illness, Medicine, and What Matters at the End

(邦題: 死すべき定め 死にゆく人に何ができるか) Atul Gawande [Profile Books Ltd]

国際教養学科 助教 オリベイラ ディエゴ

Advancements in medicine, living conditions and nutrition have extended human life beyond our expectations giving the false impression to some that we are "immortal".

Nonetheless, as Gawande reminds us in "Being Mortal", the end is inescapable.

Written by Atul Gawande, a medical doctor, "Being mortal" is a discussion about ageing and dying in present days.

What the book brings to the conversation about life's final stage is not a simple acceptance of the fact that we all age and die but how to better deal with one's own physical decline and mortality as well as those of who we love.

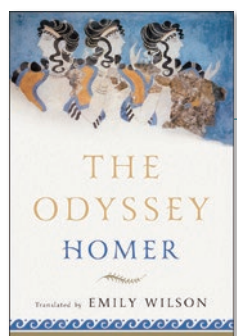
Gawande uses history and his experience as a medical doctor to demonstrate how attempts of de-medicalization and

humanization of the end of life have given us improvements as well as new challenges in the way we face ageing and death.

More importantly, the author discusses how respect for the individual and family when making end-of-life decisions can affect one's ending for better or worse.

The book is not a recipe on how to age well and die a good death but a start for a much-needed conversation about what matters at the end of our lives.

"Being mortal" is a reminder that even though ageing and dying happens to everyone, it is still unique to each person.



The Odyssey

Homer 著 Emily Wilson 訳 [W W Norton & Co Inc]

ビジネス教養学科 専任講師 ドレイジ スティーブン

The Odyssey is about succession and identity, about subreption, recognition and misrecognition, about nostos or homecoming after a long, wandering journey, and about xenia ('hospitality' is the closest word in English) or the relationship between strangers, friends, hosts and guests. It is set in a place that is at once recognisable as the real Mediterranean and Aegean world, though its geography is often hazy, and a world that contains fantastical lands, people, gods and monsters—like the goddesses Athena, Circe and Calypso; and monsters like the one-eyed Cyclopes, six-headed Scylla, the monstrous whirlpool Charybdis, and the Laestrygonians, a race of man-eating giants.

It is an epic poem, over 12,000 lines long in the original Greek. Its authorship is a complicated matter. The scholarly consensus is that *The Odyssey* was composed sometime between the late eighth and late seventh century BCE. As with *The Iliad*, the earlier poem, authorship is attributed to Homer. But no one knows whether this Homer ever existed. In any case, Homer may not be the name of an individual

creator. This 'Homer' could be several creators who banded together to compose the story of Odysseus's ten-year long attempt to return to Ithaca, his island home in the western Mediterranean where his son Telemachus and wife Penelope are waiting.

To date, there have been something like seventy translations of *The Odyssey* into English. Emily Wilson's fabulous 2018 translation, which took her five years to complete, has the same number of lines as the original Greek. But where the original was composed in dactylic hexameter (one long syllable followed by two short syllables, in lines of six metrical feet), Wilson's translation uses iambic pentameter, the more conventional metre for English narrative verse. She makes much use of alliteration, and her lines have a musical, rhythmic sway, which, she claims, parallel the rhythm of Homeric verse. She urges us to read the poem aloud. Her version is a modernising one, calling on the Muse in the poem to 'tell the old story for our modern times'.



光る生き物の科学 発光生物学への招待

大場 裕一 著 [日本評論社]

食物栄養学科 教授 上田 龍太郎

光る生き物といえば、まずホタルを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。特に短期大学部食物栄養学科の皆さんは、1年次の生物学でホタルの発光メカニズムがルシフェリン・ルシフェラーゼ反応によるものであることを学び、2年次の食品衛生学実験ではホタルの発光メカニズムを利用したATP拭き取り検査法を実際に体験し、ホタルの発光原理が身近な厨房や食品工場、研究施設などで衛生検査に広く活用されていることを学んだことと思います。

地球上には、ホタル以外にもチョウチンアンコウやホタルイカ、オキアミ、ウミホタル、発光クラゲ、発光キノコなど実に様々な発光生物が存在し、現在では全世界に900属、6,800種もの発光生物が確認されています。

本書はそれらの発光生物に関する幅広い内容を網羅しており、初期の発光生物研究者の顔ぶれや発光生物の分類、発光のメカニズム、発光生物にとって光ることの意義、環境や生物種により発光する部位や発光の色が異なる理由、発光生物

たちの進化など、興味深い内容がどれも分かりやすく説明されています。よくホタルが光る理由として雄雌間の求愛行動と言われますが、実は自分が毒を持っていて外敵に食べられないようにアピールするためでもあったり、中深層に生息する発光サメ類やオキアミ類は海底側から外敵に自分の姿が目立たないようにするために光っていたり、実に様々な理由で生物が発光していることが分かります。

著者の大場裕一先生は我が国における発光生物学の第一人者であり、これまで子ども向けの入門書から図鑑、専門的な論文まで様々な著述をされていますが、本書は入門書と専門的な論文との間に位置する「階段の2歩目」として企画・執筆されており、専門的知識を持たない人達に対しても平易に解説されています。短期大学部食物栄養学科の授業を通じてホタルの発光現象に興味を持った方はもとより、自然界に生息する生物に関心のある方々には是非一読をお勧めしたい1冊です。

新型コロナウイルスによる感染が続くなか、対策に気を抜けない日々が続いています。
大学の図書館を容易に利用できない方も多いのではないのでしょうか。
そのような方のために、図書館から読書ライフに役立つ情報をお届けします。



① オンラインによる返却期限の延長について

借りた本の返却期限が迫っているけど図書館窓口に出向けない、あるいは返却期限それ自体を忘れてしまったなど、困ったことはありませんでしたか。

実は、OPAC (Online Public Access Catalog) で所蔵図書を検索すると同時に、自宅から図書館ホームページにアクセスして、図書貸出状況の確認や返却期限を延長することができます。

- 手続方法 -

- ① 返却期限までにOPAC検索画面の「利用者サービス」から「貸出・予約状況照会」タブをクリックします。
- ② ログイン画面に利用者ID (16桁) とパスワードを入力することにより、「貸出・予約状況照会」画面に進むので、「延長ボタン」を押し、手続きを行います。詳細は、https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/pdf/manual_request.pdf をご参照ください。
- ③ 図書館ホームページのトップページから「利用者サービスログイン」ボタンをクリックすることでMyOPAC画面に入り、手続きすることもできます。



通常時の貸出の場合、オンラインによる延長手続は1回限りで、2回目以降の延長は、窓口カウンターでの手続きをお願いしています。しかし、現在、コロナ禍における特別措置として、オンラインによる延長手続を5回までできるようにしていますので、延長が必要な方はぜひご利用ください。なお、他の人の予約が入っている場合には、延長することができません。期限を過ぎてしまった場合にもオンラインでの手続きができませんので、その際は図書館事務課へご連絡願います。

図書館ホームページには、貸出期間延長のほかにもメニューがあります。図書館サービスとして、図書新着案内や雑誌最新巻案内、ペストリーディング機能が 있습니다。また、利用者サービスには、希望図書リクエストなどの機能も付加されていますので、利用してみたいかがでしょうか。

② 電子書籍の利用について

オンライン中心の授業が続き、大学の図書館を利用する機会が減っていますが、本学部では来校できない学生のために、電子書籍の蔵書を増やしています。本学部の学生が利用できる、主な電子書籍サイトを紹介します。

① 紀伊国屋書店

「KinoDen」(キノデン) は、国際関係学部と短期大学部(三島校舎)の学生・教職員に利用を限定し、一般教育、専門科目、語学テキストなど授業科目を中心とした和書約430冊を揃えています。旅行ガイドブック「地球の歩き方」や料理関係のジャンルなども所蔵しています。また、就職活動に必要なエントリーシートの書き方やSPI問題集、面接対策本なども揃えました。いつでも利用できるので、一度スマートフォンからアクセスしてみたいかがでしょうか。

② 丸善雄松堂

「Maruzen ebook Library」は、各学部が購入した電子書籍を日本大学全学で利用できる仕組みになっています。一般科目や専門科目を中心に7,000冊を超える和書を揃えており、岩波書店「現代人の教養」100冊などを利用することもできます。

③ ProQuest社

「ProQuest eBook Central」には、海外の話題作や日本の作家の英訳版、日本を紹介するガイドブックなど、約150冊の洋書が揃っています。

電子書籍サイトには、図書館ホームページ内にある電子書籍ボタンから入ることができます。自宅や学外からアクセスする場合には、「GakuNin」(学認)の認証手続が必要となります。学認の認証手続方法は、図書館ホームページで案内していますので、一度サイトを訪れてみてはいかがでしょうか。

<https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/search/ebook.html>

③ 図書郵送サービスについて

図書館ではコロナ禍で大学に通学できない学生を対象に、郵送による図書貸出サービスを行っています。

貸出対象となるのは、雑誌や禁帯出資料、大型本を除く本学部所蔵の図書です。貸出冊数は、1人合計5冊までとなっていますが、卒業論文等の提出を控えた最終学年の学部・短大の学生は、合計10冊まで借りられます。貸出期間は1カ月で、希望する方は、図書館 irb-book@nihon-u.ac.jp にメールにてご連絡ください。貸出申込の手続き後、自宅等住所宛てにゆうパック等で送付します(送料は大学負担)。

返却は、図書館窓口カウンターへの持参もしくは郵送による返送をお願いしていますが、守衛所または北口校舎や図書館前の返却ボックスでも返却できます。ゆうパックなどで返却する場合には、郵送料金をご負担願います。

また、貸出の延長(2週間)を希望する場合には、オンラインによる延長手続をご利用ください。

図書館ニュース

BIBLIOTHECA

第17号

通巻第162号

発行日/2021年11月1日

編集・発行/日本大学国際関係学部
図書委員会

<https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/>